

♦詩と批評◆第160号◆ 2022 年◆秋◆季刊

> 田中庸介 Tanaka Yosuke なかにしけふこ Nakanishi Kyoko 笠間直施子 Kasama Naoko 樋口良澄 Higuchi Yoshizumi イナン・オネル Inan Oener ジェフリー・アングルス Jeffrey Angles 新井高子 Arai Takako

〈評伝〉エドワード・J・ワッツ、中西恭子訳『ヒュパティア――後期ローマ帝国の女性知識 人』 白水社 (3960 円)

《詩集》田中庸介『ぴんくの砂袋』思潮社(4180円)

ジェフリー・アングルス『わたしの日付変更線』思潮社 (2420円)

新井高子『ベットと織機』未知谷(2200円)

(訳詩集) イナン・オネル訳『「ナーズム・オラトリオ」テキスト全訳』非売品 新刊! 〈小説〉C・F・ラミュ著、笠間直穂子訳『詩人の訪れ 他三篇』幻戯書房(3630円) 新刊! 《評論》樋口良澄『鮎川信夫、橋上の詩学』思潮社 (2970円)

新井高子『唐十郎のせりふ ――二〇〇〇年代戯曲をひらく』幻戯書房(3080円)

### ・お知らせ 1・

映画『東北おんばのうた』(監督・鈴木余位、企画制作・新井高子、80分) 待望の生上映! 山形国際ドキュメンタリー映画祭 2021 リバイバル(全席指定) https://www.yidff.jp/home.html 山形) 10月9日(日) 14:00~ 於・山形フォーラム 上映後 Q&A あり ¥1300

東京) 11月9日(水) 12:30~ 於·新宿 K's Cinema ¥1500 (予定)

11月13日(日) 15:10~ 於・新宿 K's Cinema 上映後 Q&A あり ¥1500 (予定)

.2.

田中庸介、新井高子を含む23人によるコロナ詩Web リレー(2020年4月~翌3月)が、詩集に。 『空気の日記』(世話人・松田朋春)、書肆侃侃房、全464頁、2420円

.3.

ロッテルダム国際詩祭(6月開催)の新井による朗読が、下記のサイトで視聴できます。 https://m.youtube.com/watch?v=msA39bdX2UA&t=12s

.4.

アイオワ大学国際創作プログラム 55 周年記念展覧会(於・アイオワ大学図書館)に、過去の代 表的文筆家と共に新井が選出され、略歴や詩集が展示中です。映画『東北おんば』も上映予定。

. 5 .

日本現代詩歌文学館主催、子ども向けの詩ワークショップ「わくわくなことばたち」(8月9日、 岩手県北上市)の講師を新井がつとめました。 https://www.shiikabun.jp/blog/1255.html

. 6 -

ケンダル・ハイツマン特別講義「詩と翻訳」(7月21日、埼玉大学)を新井が運営しました。 .7.

『ミて』新号は、サイト「お知らせ」欄で pdf でも読めます(半年限定)。http://www.mi-te-press.net/

【後記】なかにしけふこさん、田中庸介さんに寄稿をお願いしました。

編集: 新井高子 / 発行所: ミて・プレス / 発行日: 2022 年 9 月 30 日(金) 寄付を随時受け付けております。郵便局口座: 10090-74894051 名称)ミテノカイ

E-mail: mite@ace.ocn.ne.jp

「ソレデハミナサマ、ゴキゲンヨウ。」

## 日本全国路面電車

田中庸介

1

が赤信号 で路面電車が、へっ、

到底電車は通せなかった 崖沿いの道は曲がりくねって 事あるごとに住みにくい

**路面電車が、へっ、** 専用軌道から大通りに出るところで大きなお城があった。

2

待ちぼうけ

双頭の虎に似ている路面電車は

よく見るとおじさんとおばさんがくっついている

頭が小さいけれど渋いボーダー柄のほうがおじさん頭が大きいけれど花柄のほうがおばさんで枕の底面にある柄で判断する

どっちも眉間に「王」って書いてある

体をゆすって急ぐ

めでたいのだろう

今でも活躍しているおそろしく古い

そのまま長持ちしてしまう平気で近代文明の産物は

亡父は戦争に行った

老人はむかしの人だ

言われるまで気がつかなかったなぜそれがひらがななのか4

「ごめん」

後免町から伊野まで

むりやり会話をさせている「いの」を「いいの」という意味にしてとさでん交通、通称「とでん」。

あやまるあやまる双頭の虎

許しても許しても

へつ、

あやまってくる

はりまや橋。にぎやかに

雨である

限りがないのにあなたは

知り得ないのに

現れてくれた

千年前

湖のほとり

暗い部屋の中で

詩人が光を見上げて書いた

(それ以前

それ以降

天の川の中心で

巨大なブラックホールが

累代つづいて銀河に流させる)

千年後

林のほとり

明るい部屋の中で

私が闇を見上げて考える

大きなものは

小さなものとして

かたちを取り

小さなものの細かい踊りに

大きなものが

現れてくれる

※アルメニアの聖人詩人、グリゴル・ナレカツィの『哀歌集』第三四番といて座A\*についての記事 から声を借りた。

ごはんをよそる木の杓子ですよ。

こびりッ付きやア、そのまま舐みるアレですよ。

素直にごらん。しげしげと見てごらん、手鏡みだいに。丸ァるいあたまの生ィ申されて、細こィ首がなお

ッこあるでァないか。だァもの、そう呼んだがしょう、あんだァも、そら、呼びかけるがしょう。

しゃもじさん、

おしゃもじさん、ってねぇ。それァ、人の形だァもの。

あらしゃいますとも、おしゃもじざまも。

小石が二ァつ。ぎょうさん、並んでおらしゃるがあ、どぉれも、埃りバかぶっておるがあ。ゆぐ見ょいしょ りやア、こどもの名アと年齢がある。ひょろ長いその首ッこにア、 橋桁くぐって、まっ直ぐ行って、 左 サ曲がりやア、小ィちやい 祠 のありまして。 台座のうえにア、ほけん

合一サイ アダチフクシ

会一サイ イシイ トミ>

ヘーサイ カワノシズ〉

だアども、 目ッこも鼻ッこもねア。髪の毛いっぽん描がィてねア。 すれば、 のっぺらぼうのレイコ

ンかィ。ここィらじゅう、 レイコンの人形だらけや。

の。その赤い鳥居にア、 川すじを一里くだりやア、ま あらしゃいまして、となりの村にも。ハイカラだィねえ、漢字があるもなった。

(御社母子稲荷)

母と子のおしゃもじさまのおいなりさァま。

合わして。おレイしたのや、レイコンも。

て、きりきりとひねり出しやア、トッサに、意味が走って通る。通りすぎて、小石も狐サ化けたで 不思議イねえ、漢字というのア。どう書ぐか、どう書ぐべきか。思いの沼が苦しんで、無理じィしゃもしょ

ほさほさと、白い尾っぽの揺れて、揺らして、

ねアか。

そら、ふり向イて、

ひと山越えたら、

おらしゃいましたよ、

杉の木蔭サ、野ざらしで。山のごとぐ積まィてあるなあ、レイコンが。フクがトミがシズがヤエが、キッ゚゚ニゕゖ゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚゚ って。どうもこうもオッ欠けてるがあ、目鼻も乳房も、とっくに病魔や。背面サまわれば、刻銘は、 その足もとに。お地蔵さんよか、ちィっと面長。この村にア、女の石神あらしゃって、杖バにぎょしょしゃ まんな こしぎゅ 《蛇苦止明 神》

邪教の女のおったでねァか。 お見事な、足掻きっぷりだや、その文字の当てようが。しゃもじは杓子と申しましょう。

旅しておったや、

杖ついて、鈴ならして、

ここも、そこも、

また また また ここし な ことし な の 腹はいっそう擦すって、 赤子のできん 女 の 腹はいっそう擦すって、 歩う で また また また また また また また また で またま で あすこも、

(石投げるモンもあったさ)この、その、あの、レイコン難して。

レイコンが積み上がる。

### **詩人ナーズム・ヒクメットの二篇の詩** 【トルコ語詩の翻訳90】

## イナン・オネル

得て響いた。きっと再演を求める声が広がり、全国で読み上げられ、歌い上げられることになる。今号では、ナーズ で盛大に開催された。ヒクメットの詩、ヒクメットの日本へ、日本人への友愛に満ちたメッセージが日本語で肉声を ム・ヒクメットが一生を通じて挑んだ社会主義社会建設を主題に据えた二篇の詩を訳すことにする。 詩人ナーズム・ヒクメットの生誕一二〇年を記念して企画された「ナーズム・オラトリオ」は九月十六日に名古屋

## 建物と建設労働者たち

それはやや少し困難な仕事だ 建設労働者たちが大声で歌を歌っている しかし建物は歌を歌うようには建てられない

建設労働者たちの心は

祭の広場のように賑やかだ

しかし建設現場は祭の広場ではない

建設現場は土埃

泥、雪

建設現場では足が挫き

手は血に塗れ

建設現場では紅茶にいつも砂糖が入っているわけではない

パンはかならずしも綿のように柔らかくない

いつも熱いわけではない

仲間はみんな英雄ではない

友達がいつも誠実ではない

歌を歌うようには建物を建てられない

やや少し困難な仕事である

困難は困難ではあるがそれでも

建物が高くそびえる、より高く

窓際に鉢を並べた

下の階では

最初のベランダに太陽を運ぶ 鳥たち

翼に乗せて

そのトキメキがある

梁に 柱に 煉瓦に 瓦に

高くそびえる、 より高く

高くそびえる 建物は 血汗を流して

### 勝利について

恐ろしい手で傷口を抑えて

唇を噛みしめながら

痛みに耐える

今や希望は 裸で無慈悲な

叫びになった

そして勝利は

もはや何も容赦しないほどに

爪で剝がして得るものである

日々は死の知らせとともに訪れる

日々は重い

敵は凶暴で

残虐で

狡賢い

仲間が戦いながら死んでいく

――どれだけ生きる権利があったとしても―

仲間が死んでいく

―とても多くの仲間が―

まるで歌を歌いながら旗を片手に

祭日の抗議集会に出かけるように

それほど若く

それほど無鉄砲に

日々は重い

日々は死の知らせとともに訪れる

もっとも美しい世界を

私たちは自分たちの手で焼き払った

そして私たちの目は泣くことを失った

少々悲しいが真っ直ぐに立っている私たちをその状態で残して

涙は去っていった

だからこそ

私たちは敵す術を忘れた

これから辿り着く場所へ

血塗れで辿り着く

そして勝利は

もはや何も容赦しないほどに

爪で剝がして

得るものである

一九四一年 秋

### 来て、見て

### 笠間 直穂子

は、一九八五年、ニューヨークに生まれた。チありながら、今回取りあげる歌はフランス語ので、変則的ではあるけれど、扱ってこんなふうに目を留めることもなかったなら、うと思うので、変則的ではあるけれど、扱ってこんなふうに目を留めることもなかったなら、みることにした。なにより、聴いてほしかっただろうと思うので、変則的ではあるけれど、扱っていイチ出身の両親をもつレイラ・マッカーランス語ので、変則的ではあるけれど、扱ってのと思うので、変則的ではあるけれど、扱っていイチ出身の両親をもつレイラ・マッカーランス語の歌を読む、という題名の連載でフランス語の歌を読む、という題名の連載で

地に足がついている。 
ルイチ出身の両親をもつレイラ・マッカーラは、一九八五年、ニューヨークに生まれた。チェロを中心にいくつもの楽器を演奏するシンエロを中心にいくつもの楽器を演奏するシン点に活動する。二〇一三年に、アフリカ系アメ点に活動する。二〇一三年に、アフリカ系アメルカ人の詩人・作家、ラングストン・ヒューズスなどアメリカのさまざまな庶民音楽、それにスなどアメリカのさまざまな庶民音楽、それにスなどアメリカのさまざまな庶民音楽、それにスなどアメリカのさまざまな庶民音楽、それにスなどアメリカのさまざまな庶民音楽、それにスなどアメリカのさまざまな庶民音楽、それにスなどアメリカのでもで、カは抜けているけれど心のでは、

新作アルバム『温度計を割る』は、ハイチに 新作アルバム『温度計を割る』は、ハイチに 対・ハイチ」のアーカイブ音声に、そこから着 オ・ハイチ」のアーカイブ音声に、そこから着 相された音楽を合わせた作品だ。アメリカ合衆 国のデューク大学に収蔵された音声を、数年か 力五七年から三十年あまりも君臨した、デュヴ ルバムとして制作した。背景には、ハイチに一 大型による独裁政権がある。反体制派と 見なされれば容赦なく弾圧され、マッカーラの 見なされれば容赦なく弾圧され、マッカーラの 見なされれば容赦なく弾圧され、マッカーラの 見なされれば容赦なく弾圧され、マッカーラの として制作した。背景には、ハイチに がいるとして制派と のアーカイブ音声に、そこから着 は、ハイチに

> いる。 亡命者へのインタビュー音声も組みこまれて国への亡命を余儀なくされた。アルバムには、

というジャンの言葉から採られている。度計を割ったところで、熱は下がりはしない」ットフォームだった。アルバムタイトルは、「温ジオ・ハイチは、抵抗の声を広める重要なプラル・モンタス夫妻がパーソナリティを務めるランキーナリストのジャン・ドミニクとミシェ

ハイチの公用語は、旧宗主国の言語であるフランス語と、フランス語の保護に存らす人びとはレオール語。亡命先の合衆国に暮らす人びとはルのラジオ放送はフランス語、合衆国への亡命を語を使う。アルバム内では、ジャンとミシェンオール語と英語で歌う。 かたしは、英語とフランス語の部分は理解でわたしは、英語とフランス語の部分は理解でわたしは、英語とフランス語の部分は理解できる、ハイチ・クレオール語は英語で歌う。

思想犯を収監し、拷問・殺戮をおこなった監想の名を曲名とする「フォール・ディマンシュ」す歌、故郷を逃れて生きるハイチ人ディアスポラの経験を振り返る歌。そんな収録曲のなかに、フレインはハイチ・クレオール語、それ以外は英語の、短い歌だ。

来て、見て、日がのぼるのを

太陽は誰にも奪えない眠たい目が日の光に出会う

みんな不思議がるなぜわたしがあなたのことを好きなのか、

がるかたしになにが見えているのかと、不思議

わたしはあなたのためにここにいるように、

来て、見て、日がのぼるのを

て 目を開けて、日光が差しこむのを受け入れ

みんな不思議がるなぜわたしがあなたのことを好きなのか、新しい日のはじまりを受け入れて

わたしはあなたのためにここにいるあなたがわたしのためにここにいるように、なぜこんなことがあるのかと、不思議がる

それだけで天国のようあなたがわたしのものだと知る恐怖はわたしたちの心を操るかもしれない恐怖はいつ襲ってくるかしれない

来て、見て、日がのぼるのを

ふうに語る。 いイチ民謡風の、のんびりしたメジャーコーハイチ民謡風の、のんびりしたメジャーコー

ジャンとミシェルは仲のよい夫婦だったが、ミかった。これを聞いた友人たちはミシェルがなぜ彼にはコーヒーをもってきて起こし、論説の原稿がにコーヒーをもってきて起こし、論説の原稿がにコーヒーをもってきて起こし、論説の原稿がにコーヒーをもってきて起こし、論説の原稿がにコーヒーをもってきて起こし、論説の原稿がにコーヒーをもってきて起こし、論説の原稿がと平気で答えたという。

面を、ひとつの古典的な恋の歌として、想像しを飲みながら原稿を読むうちに夜が明ける場るとはかぎらない良さも見えるのかもしれなるとはかぎらない良さも見えるのかもしれなるとはかぎらない良さも見えるのかもしれな

てみたのだ。

害された。犯人はいまだ不明だ。で構成した「ジャンとミシェル」の直後に収められている。ラジオ・ハイチを支えた二人は繰られている。ラジオ・ハイチを支えた二人は繰られている。ラジオ・ハイチを支えた二人は繰り返し殺害予告を受け、二度にわたり国外へ逃り返し殺害が高すラジオの音声

佐女には、そのことがよくわかっている。 世政を告発し、抵抗と亡命の歴史を伝えるだいなく、身を賭して抵抗の一翼を担ったひと も、ジャンではなく、ミシェルに焦点を定める も、ジャンではなく、ミシェルに焦点を定める を保たせてくれるのは、きっと、隣にいるひと を保たせてくれるのは、きっと、隣にいるひと を保たせてくれるのは、きっと、隣にいるひと の息づかい、いつもの飲み物の匂い、それらを の息づかい、いつもの飲み物の匂い、それらを がはなには、そのことがよくわかっている。

Vini Wè

Leyla McCalla

Leyla McCalla, Breaking the Thermometer, Anti-, 2022.

Leyla McCalla, « The Story behind the Song: Vini Wè », YouTube, 2022/02/08. https://youtu.be/aarGSuryx6Q

Éric Delhaye, « Loin d'Haïti, près des combats », Le Monde diplomatique, août 2022.

# 九月十三日、パリ、ゴダール、

樋口良澄

には早すぎてわからない。左翼系の新聞「リベラシオン」が電 追悼文を出していた。午前には、美術館に向かうため、 エ・デュ・シネマ」もHPで「ゴダールが死んだ」という短い 子版で午前には伝えていたというが、気がつかなかった。「カイ を見た。彼の過去の作品を流し、識者がコメントしている。私 はたまたまフランスにいて、テレビで追悼番組が放送されるの が関わった合法的な安楽死によって亡くなったという。その日 トロに乗っていた。 ゴダールが九月十三日に亡くなった。スイスの自宅で、医療 私はメ

ことを試みていたのか、ゴダールの最晩年の境地が知りたくな なってしまった『イメージの本』(二○一八) 以後、どのような った。映像や言葉が、やがて公表されるだろう。 その死が、安楽死と知って、一般に公開された作品の最後と

体験させられる。デジタル・カルチャーの先駆のような仕事だ を含んだ――は、最期のメッセージとなるのだろうか。 今となっては『イメージの本』の彼自身によるナレーション― ことは、ゴダールに親しんだ人なら誰もが思い当たるだろう。 からすでに、こうしたコラージュとそれを越える情動があった が、この体験はゴダールだけのものだ。そして六○年代の作品 ィックなものではなく、観た者は、映画の鮮烈な瞬間、世界の、 いいだろう。すでに彼の映画的コラージュの集大成は『映画史』 (一九八九~九八) にあったが、コラージュといってもスタテ 『イメージの本』は、映画のコラージュとしての作品と言って **人間の、深奥をえぐるような映像とそれが発する激しい感情を** -ホロコーストやパレスチナ紛争といった世界の悲惨への怒り

ないように望みたい。 ろう。「リベラシオン」電子版の見出しとなった関係者の発言、 なったことは確かだ。 「彼は病気ではなかった、ただ疲れ果てていた」が一人歩きし ゴダールの最期は、死について向き合ってきたことの帰結だ 詳細を知る由もないが、厳粛な気持ちに

集を組んで追悼していた。「リベラシオン」は最初に伝えたメデ 想像できる。だがこのパンデミックについてはどうだったのだ 況に関心を持った彼の、例えば、ウクライナについての視点は かし、晩年について詳述されているわけではなかった。常に状 ィアだけあって、長文の評伝的追悼、著名人のコメント、在り し日のたくさんの写真を掲載し、見事な記事になっていた。 翌日の「リベラシオン」や「ユマニテ」は、熱のこもった特

ながらカフェで追跡していると、 ゴダール追悼の載った新聞を買い集めて、そんなことを思い ヨーロッパは多くの国でマス

> ことはかなりありがたかった。 スクをつけると呼吸が苦しくなる私にとって、つけないですむ など、必要な人はつけているのだろうが、鼻が悪く、長時間マ マスク無しは想像以上の解放感だ。もちろん基礎疾患がある人 クの義務を解除しているから、客もギャルソンもつけていない。

生まれざるを得なかった。 グループから聞こえてくるのは日本語。この空間の中でマスク をつけていることはどういうことなのだろうという、訝しさが るのは日本語だった。駅やメトロの中でも、それをつけている たが、雑踏でマスクをしているグループがあると、聞こえてく 生の謳歌だ。観光地は私には無関係なので通り過ぎるだけだっ 観光スポットは長蛇の列だった。ゴダールの死とは全く反対の、 こうした規制緩和を受けて移動熱が起こったようで、昨日も

染源として危険信号が灯っていたと思う。 これまで換気により安全だとされてきた通勤電車など、私は感 題視されていたが、厚生省がエアゾル感染を認めたのは昨年十 どに発する飛沫によって感染する、と厚生省は捉えていた。故 マスクの文化は残るのではないか。もともとコロナ以前から、 や密閉空間の除菌について、もう一度検討する必要はないのか。 月になってからである。エアゾル感染に対して、マスクの効用 から感染することを認めていて、この違いが医療関係者から問 ゾル感染は起こらないとされていた。しかしWHOはエアゾル に、マスクはきわめて有効だと推奨された。空気中に漂うエア だが、効能とは別に、コロナ・ウイルスの流行が終息しても、 新型コロナ蔓延の初期、このウイルスは主に人々の話す時な

ける文化が日本にはあった。 衛生のためばかりでなく、自分を守る仮面のようにマスクをつ

の終息した後の病い、新しい「日本病」でなければよいのだが。 日の日本人観光客から、そう思った。それがコロナ・ウイルス ではないか。マスク無しの空間で、それを執拗につけ続ける昨 いや見ることさえ気づかない閉塞に、この列島は陥っているの 打開する可能性があるにも関わらず、 それに加え、新たな動因も加わったような気がする。事態を ゴダールの映像は、閉塞を破ろうとする力であふれていた。 それを見ようとしない、

ている。 すイメージの力は、コロナ下の日本で最も必要なものを提示し して「彼方」が「いま・ここ」と同時に存在していることを示 街を疾走する若者たち、コラージュ映像の縦横無尽な飛躍、そ 映像をまとめて見直したいと思った。

い違いでした。お詫びして、ウェブ版では掲載原稿のように訂正し に自殺未遂騒ぎを起こしている」と書きましたが、これは筆者の思 \*一六〇号紙媒体に載せた拙文の上段三段落で、「ゴダールは過去

## 【小特集:追悼·大岡俊明】

小特集を組みました。(新井)んをしのび、やはりその教え子のなかにしけふこさんと編集人が予備校時代に教わった世界史家、大岡俊明さ

### 4

## 学問へと招く力

東欧革命と大学受験と大岡先生の思い出

なかにしけふこ

都立国立高校二年生の冬、「人間のいない歴史」に関心をもって地球科学関係の仕事につくつもりで理科系の受験勉強をしていた。無機化学の冬期講習に出かけようとしたその朝、墨塗りの背景に白抜きの墨書でテレビ画面に「天皇朋御」のテロップが映し出された。始業式では老に「天皇朋御」のテロップが映し出された。始業式では老に「天皇朋御」のテロップが映し出された。始業式では老に「天皇朋御」のテロップが映し出された。始業式では老に「天皇朋御」のテロップが映し出された。始業式では老に「天皇朋御」のテロップが映し出された。始業式では老に「大皇朋御」のテロップが映し出された。当時二十代後半だったクラス担任は英語教師で、隣のクラスに学の妹君がいた。先生は私たちに神妙な表情で語った「校長生は泣いてらしたけれど、みなさんは科学的に考えまた生は泣いてらしたけれど、みなさんは科学的に考えまた。当時は、当時に関心を表します。

天皇の死と前後して世の中では歌舞音曲が自粛された。寒黙な公民科の先生はひたすら《ゆきゆきて、神軍》を見きですかあー」と告げて通り過ぎる車の広告のなにがいした。井上陽水がノンシャランと「みーなさーん、おげんした。井上陽水がノンシャランと「みーなさーん、おげんした。武蔵野陵へ向かう葬列はものものしく、八王子の見た。武蔵野陵へ向かう葬列はものものしく、八王子の見た。武蔵野陵へ向かう葬列はものものしく、八王子の見た。武蔵野陵へ向かう葬列はものものしく、八王子の見た。武蔵野陵へ向かう葬列はものものしく、八王子の見た。武蔵野陵へ向かう葬列はものものしく、八王子の見た。武蔵野陵へ向かう葬列はものものと、八王子の見た。武蔵野陵へ向かう葬列はものものと、八王子の見た。武蔵野陵へ向かう葬列はものものと、八王子の見た。武蔵野陵へ向かう葬列はものものと、八王子の見た。

る役にあった若い兵士たちに、当時小学校に入りたてのさい」。市境の検問所で、西側から来る自家用車を検分す年のことだった。アレクサンダー・プラッツもペルガモドイツ在外研究中に家族で行ったことがある。一九七九ドイツをが崩壊した。ベルリンには小学生の頃、父親の西ンの壁が崩壊した。ベルリンには小学生の頃、父親の西三年生になった。東欧革命の年だった。秋にはベルリ三年生になった。東欧革命の年だった。秋にはベルリ

妹がリスのぬいぐるみをさっと差し出す。「りっしー!」 「Rissie?」空気がゆるむ。あ、Japaner の子どもづれか、 「Rissie?」空気がゆるむ。あ、Japaner の子どもづれか、 いいだろう、行け!と通してくれた。家族の物語として いならず思い出される場面になった。あのおにいさんた ちはどうしているだろう、あの壊れそうになかった壁が 壊れるなんて! 科学史を学ばずに学ぶ受験物理が手に でかず、秋の文化祭にも出て歌っていた私である。もち ろん受験勉強そっちのけでテレビにかじりついた。

下レクサンダー・プラッツに群衆があつまる。壁はど で、そして東ドイツの国境を越えて西側へむかう自家用 へ、そして東ドイツの国境を越えて西側へむかう自家用 車の大渋滞の映像を見ているうちに、とうとう本格的に 要験勉強が手につかなくなった。明日塗り変わるかもし れない世界地図を前に、いまの段階で伝えられる世界地 むとうま、東大理科二類にも東北大理学部にも落ちた。 あたりまえである。受験勉強より「ベルリンの壁とわた し」がだいじだったのだ。実験でうつくしい色の物質を 作れる化学はすきだけれど、科学史抜きの古典物理学は でれる化学はすきだけれど、科学史抜きの古典物理学は でれる化学はすきだけれど、科学史抜きの古典物理学は でれる化学はすきだけれど、科学史抜きの古典物理学は でれる化学はすきだけれど、科学史抜きの古典物理学は でれる化学はすきだけれど、科学史抜きの古典物理学は でいる・シャンのといても、理科系 でいる・シャンのといても、理科系 でいるといても、理科系 でいる・シャンのといても、理科系 でいる・シャンのといても、理科系 でいる・シャンのといる・の外側

子ばかり、男女同数の高校のクラスとはまったく違って 先生方もいらしたし、研究者兼業の先生方も多かった。 史の講義には熱心に出た。大学教員として本務校を持つ のは、数々の名講義のおかげだった。英語と古文と世界 子校的環境のなかでも不登校にならずに予備校に通えた ラス八〇〇人近くの学生がいた。不慣れな電車通学と男 いた。激しい競争の時代だったから、同じコースに四ク ていたのだろう。不本意ながら浪人生活を送る学生たち も女子もない、をつかのま信じることができた。 けとめて学べば学ぶだけ成績がよくなった。勉強に男子 噴きこぼれかけた女子生徒にも分け隔てがなかった。受 れた。公立校で放牧され、あたまの回転をもてあまして みなく学識を注ぎ、知識のアウトプットの方法を伝授さ に接して、先生方は学問の場へ招く情熱を隠さず、惜し いま思えば高大連携教育の役割を大学受験予備校が担っ 駿台予備校お茶の水三号館の大教室には見渡す限り男

大岡俊明先生のたたずまいはひときわ印象に残ってい

actor として立ち上がってくる。学生はひたすらノートを 陥らず、手触りを伴って歴史のなかのもろもろの要素が えながら淡々と、そしてとうとうと語る。きわめて博識 る。陽に灼けた顔色、季節ごとに素材と模様の異なるバ 長い目で見て心を耕す重厚な学問の扉を開くために語る 現在の費用対効果最優先の時代にはなかなか勇気の要る、 史学の学習につながる書物もよく紹介してくださった。 明する技術を鍛えてくださったように思う。大学での歴 を課されたとき、因果関係と背景にある構造を明快に説 院入試一次試験に通じる。語句説明と比較的長めの論述 は東大人文社会系研究科の思想・歴史系書研究室の大学 習も開講されていた。東大入試の歴史系科目の出題形式 ので必死である。夏期講習や冬期講習では論述対策の演 取る。来年こそはどこかに入学を決めなければならない 心」だけでなく「周縁」への目配りも的確、博識が衒学に っしゃった。授業は西洋史と東洋史の通史なのだが、「中 でお話が面白いのだ。「歴史の流れ」ということをよくお ンドマンのような風姿で教壇に立ち、頬に手を当て、考 ンダナを巻いたボブカットへアにジーンズ姿、歴戦のバ という行為が予備校で許された時代だった。

学生運動・市民運動に関わった予備校教師たちの逸話 出身の伝説的な秀才。孤高の在野研究者の迫力が文転学 関に身を投じて予備校教師になった東大理学部物理学科 理科系の学生には山本義隆伝説がとどろいていた。全共 理科系の学生には山本義隆伝説がとどろいていた。全共 とにも魅力的に感じられた。

大岡先生は東大文学部東洋史学科出身でアフリカ史専大岡先生は東大文学部東洋史学科出身でアフリカ解放攻、戦後歴史学の重鎮・上原専禄とともにアフリカ解放攻、戦後歴史学の重鎮・上原専禄とともにアフリカ解放攻、戦後歴史学の重鎮・上原専禄とともにアフリカ解放攻、戦後歴史学の重鎮・上原専禄とともにアフリカ解放でいたときく。駿台予備校の「世界史」の教科書と授業にていたときく。駿台予備校の「世界史」の教科書と授業にと専攻領域について多くを語らなかった。アフリカ解放と専攻領域について多くを語らなかった。アフリカ解放の書誌をすぐ見つけるだろう)、詩を書いていらしたとはの書誌をすぐ見つけるだろう)、詩を書いていらしたとはの書誌をすぐ見つけるだろう)、詩を書いていらしたとはの書誌をすぐ見つけるだろう)、詩を書いていらしたとはの書誌をすぐ見つけるだろう)、詩を書いていらしたとはの書誌をすぐ見つけるだろう)、詩を書いていらしたとはの書誌をすぐ見つけるだろう)、詩を書いていた方で、一人間を関する。

東欧革命につづいてこれだけ状況が動いているのだも東欧革命につづいてこれだけ状況が動いているのだも、大教養学部文科三類に入ることになった。ここから先、大教養学部文科三類に入ることになった。ここから先、対象を

社会とのつながりを保てる学問を研究したい、西洋古社会とのつながりを保てる学問を研究したい、バブル崩壊とともに文学部卒女子対象の求人事情が凍り付く時代に真っ逆さまに落ちていった。求人事情が凍り付く時代に真っ逆さまに落ちていった。は意識を傾けるあまり「眼に見えない心の問題」ということにして宗教史や文化史を扱いづらそうにしている戦後歴史学の限界もまのあたりにした。

\*

### 滑舌の竜巻

――世界史家・大岡俊明をしのぶ

新井高子

ると、二〇二一年に逝去されていたことを知る。呆然とられた。この夏、あるきっかけでその名をネット検索すった。世界史家、大岡俊明。駿台予備校で教鞭をとっておった。世界史家、大岡俊明。駿台予備校で教鞭をとってお

晩年には詩を書いていた、と。ふしぎな縁を感じた。っては恩人でもあったから。さらに検索の奥へ潜ると、する。ご本人に伝わっていようがいまいが、わたしにと

桐生と足利の県境にある小さな町に根を下ろす古めかしい家で育ったわたしは、だからこそ脱出したくて、大しい家で育ったわたしは、だからこそ脱出したくて、大き暮らす日々。いまからすれば当たり前にも思う。家業き暮らす日々。いまからすれば当たり前にも思う。家業の織物工場で働く女工さんも含めた、濃い繋がりの「大家族」のなかから、急にひとりぼっちになったのだから。家業のだめなと決まって咳が止まらなくなり、風邪かと思って常備薬を飲めばからだじゅうに発疹ができる……。からだの悲鳴をどうすることもできずに投げ出していたが、らだの悲鳴をどうすることもできずに投げ出していたが、らだの悲鳴をどうすることもできずに投げ出していたが、られていたから。

うに待ったなしで饒舌を続けられる人に会ったことがな 思うが、メモを見る素振りもなかった。つまり、毎時間が 音量と情熱で、とうとうとしゃべり続けるのである。板 はじめる。講義は五十分だったろうか。均一なピッチと ると、田舎育ちのわたしには信じられないほどの早口を う片方ではピンマイクをわざわざ手に持って口に近づけ て、頬杖というより歯痛のような位置に片手を添え、も ると、長髪を靡かせて椅子に屈み気味に腰掛ける。そし なく、一九四〇年代生まれの、 滑稽味を感じた。東京言葉だが、いわゆるNHK的では 全き独演会だったのである。その後を含めても、あのよ 書はほとんどしなかった。駿台の教材を携えていたとは うな弁舌の花を大岡に感じる。 いと思う。耳の奥でいま語り口を思い出しつつ、そのよ 回転力とアジテーションの力。戦後版講釈師と言ってい い。時折、にんまり笑うときは、知の魔王のごとき深淵と その人は、長身の背中をまるめながら教室の扉を開け 議論好きな世代が育んだ

であることを彼はアジテートしていたと思う。博覧強記が等に詳しかった。いや、そうあることで、すべては対等も、政治史も経済史も科学史も哲学史も……、すべてがら、東アジアも再南アジアもラテンアメリカうまでもなく、東アジアも東南アジアもラテンアメリカうまであることを彼はアジテートしていたと思う。博覧強記であることを彼はアジテートしていたと思う。博覧強記であることを彼はアジテートしていたと思う。博覧強記であることを彼はアジテートしていたと思う。博覧強記であることを彼はアジテートしていたと思う。博覧強記であることを彼はアジテートしていたと思う。博覧強記であることを彼はアジテートしていたと思う。博覧強記であることを彼はアジテートしていたと思う。博覧強記をいると思う。

とはこういう人のためにあるような語だが、うけとれたのがごく一部にすぎなくとも、詳しさとは面白さのタネのがごく一部にすぎなくとも、詳しさとは面白さのタネーを紹介してくれ、ニーチェ、李賀、浅田彰、ギルガメシー、一般事詩……。難解だったろうに、心身症になりかけのなの子が立ち直れたのは、このような本をただ夢中で追りかけたからであって、なにが病いを敷うかはたいへん複雑だなと思う。

思えば、単なる勘であれ、エドワード・サイードの『オリ 語ることができるのは、高校教師を長らく動めたからだ たに違いない。三木は地域史ではなく世界史をじぶんが 娘が面白いと感じられたことじたい、大岡の影響があっ は三木亘というもう一人の秀逸な語り部と出会う。 ともわたしの学生時代はそこには世界という枠組がなか という職場では東洋史学科に属したように、少なくとも 理由の一つも、 としばしば口にしていたが、大岡が予備校講師を続けた エンタリズム』をさらに激しくしたような三木史学を小 木はやんわりした抑揚と余白を操る。振り返れば、 舌のリズムのうえに乗せる大岡に対し、関西生まれの三 った。むろん二人は好対象でもあって、豊饒な知識を滑 贅沢だった。 『ミて』読者はご存知の通り、慶応大学に入ったわたし つまりその人は、世界史の強靭な語り部であったのだ。 もしやそれではなかったか。三木が大学 いま

別整理」などの教材があった。何十年も開くことがなか 点筆者)には、「完全無欠な教科書・受験参考書は天国にし ると無理が生じます」。また、「調査のための手引き」(傍 え方も個性的であって、一定の決まりきった枠におさめ のねらい」には、このような字句が太字で記されてある。 かな記述ながら大岡の哲学が透けて見える。その「編集 ったそれを久しぶりに段ボール箱からとり出すと、 言いたかったのだと、 文章はない。それらを繋ぎ合わせるのは各自の調査だと や地図ばかりなのだ。つまり、項目的要素だけがあって、 界史サブノート」等じたい、 られているのは、年表、地図、事典。じつは、教材の「世 かない」と箇条書きで記されてから、参考書として挙げ 「歴史観・世界史観は決して一様ではなく、世界史の教 当時の駿台予備校には、「世界史サブノート」「テーマ いまになってようやくわかる。 印刷されてある内容は年表

ポストコロニアリズムのにおいを嗅いでいたのである。 後者を経由したもので、中世のイスラム文化は、西欧も 面白いお話をひたすら聞いてしまうところがあるわたし とイスラム世界が継承するが、西欧へのその伝播は主に ていた。その重みがどれだけ汲みとれていたかはともか **モ書きもある。世界史の動向を大岡は手ぬかりなく伝え** えに社会主義思想が普及した、などという鋭い指摘のメ 生まれた労働者層に、キリスト教会は布教を怠ったがゆ また、べつのページを捲れば、産業革命によって新たに とがわかる箇条書きが幼い字で記されてあるではないか。 東欧も全く及ばない最高の文化だった、というようなこ 書き込みには、例えば、ヘレニズム文化はビザンツ帝国 さというものだろう。 むろん、彼の講義はある流れでそれらを紡いでいた。 いや、わからなくともときめきを感じられるのが若 ノートをとるのが上手かったとは思えないのだが、

その詳しさの一例を挙げれば、例えば十六世紀ヨーロッパの科学技術史であれば、解剖学や飛行機の構想をしたダヴィンチ、地動説のコペルニクスはともかくとして、たダヴィンチ、地動説のコペルニクスはともかくとして、たダヴィンチ、地動説のコペルニクスはともかくとして、かかたヴェサリウス、地球の磁力を解いたギルバート、中の上げられているではないか。いま見返して、種村季助り上げられているではないか。いま見返して、種村季助り上げられているではないか。いま見返して、種村季助り上げられているではないか。いま見返して、種村季助り上げられているではないか。いま見返して、種村季もでに教わっていたことに驚くが、固有名詞は頭に残なったがとも、当時のわたしは黒魔術と科学が入り混じったらずとも、当時のわたしは黒魔術と科学が入り混じったらずとも、当時のわたしは黒魔術と科学が入り混じったらずとも、当時のわたしは黒魔術と科学が入り混じったらずとも、当時のわたしは黒魔術と科学が入り混じったらずとも、当時のわたしは黒魔術と科学が入り混じったらずとして、

さらに、大勢相手の数室で、作文を書いてもってきなさいという機会を設けてくれたのも忘れられない。最初の回は、中村雄二郎『術語集』の感想だった。すると、指定の時間に、提出者一人一人を講師控室に呼び、それぞ定の時間に、提出者一人一人を講師控室に呼び、それぞ定の時間に、提出者一人一人を講師控室に呼び、それぞ定の時間に、提出者一人一人を講師控室に呼び、それぞ定の時間に、提出者一人一人を講師控室に呼び、それぞ定の時間に、提出者一人一人を講師控室に呼び、それぞ定の時間に、提出者一人一人を講師控室に呼び、それぞたしにはなにも返すことばがなかった。いまよりずっとと思ったことをこれからも書き続けてください」というと思ったことをこれからも書き続けてください」というと思ったことをこれからも書き続けてください」というと思ったことをこれからも書き続けてください」というと思ったことが、その怪優的微笑から溢れ、下を向いたわような一言が、その怪優的微笑から溢れ、下を向いたわような一部であると、相手の数室で、作文を書いてもってきなさいという機会を設けている。

リス』展が開かれているのを知り、ふと当時を思い出して、何気なく「駿台予備校 大岡」をネットで検索したにて、何気なく「駿台予備校 大岡」をネットで検索したにて、何気なく「駿台予備校 大岡」をネットで検索したにて、何気なく「駿台予備校 大岡」をネットで検索したにすぎないのだ。そして、計報を知ったわたしは、呆然としつつ、遅まきながらその世界史の本を読もうと思った。あの手この手で検索した。だが、ないのである。アフリカあの解放運動に身を投じたこともある若き大岡が、東京大学文学部東洋史学科を卒業してほどなく書いた論考「アジア・アフリカか、ユーラフリカか――アフリカ史に対する世界史の視覚と視野をめぐって」(『思想』五五六号、岩波書店、一九七〇年一〇月)など、アフリカ史に対きな世界史の視覚と視野をめぐって」(『思想』五五六号、岩波書店、一九七〇年一〇月)など、アフリカ史に関わる一九七〇年前後の雑誌掲載文はいくつかあったが、ほかは、当時、期待の気鋭であったに違いないが、その後は入は、当時、期待の気鋭であったに違いないが、その後は入間題の解答解説くらいしかない。

テープ起こしの話も幾度となくあったかと思う。とだろう。まして大手予備校の人気講師だ。みずからぺただろう。まして大手予備校の人気講師だ。みずからぺただろう。まして大手予備校の人気講師だ。みずからぺただろうと思った。当時聞いた講義

事ると、この人は、文字にしないことを選んだのではないか。完全な世界史などなく、各々の事象を繋ぐのはいか。完全な世界史などなく、各々の事象を繋ぐのはたのではないか。かつての教材に解説文がなかったようたのではないか。かつての教材に解説文がなかったようたのではないか。かつての教材に解説文がなかったようなかでは大袈裟ではなく、ひとつの宇宙的図書館が砂塵を上げて消えたような……。

ともかく、その影は文字にしておくべきだと思った。 大勢の教え子がいるはずである。知り合いにもいるかも しれない。Facebook に投稿すると、なかにしけふこさん が応答してくれた。そこで、彼女とともにささやかなが

山之口貘を敬愛していたともあった。予備校生たちに作報欄に関する記述のほかにも思い出話などがあり、大岡報欄に関する記述のほかにも思い出話などがあり、大岡報欄に関する記述のほかにも思い出話などがあり、大岡報欄に関する記述のほかにも思い出話などがあり、大岡報欄に関する記述のほかにも思い出話などがあり、大岡報機に関する記述のほかにも思い出話などがあり、大岡報に関する記述のほかにあたった。予備校生たちに作ると、開成中学・高校時代を

とば選びや改行にその地声が生きている。とが選びや改行にその地声が生きている。ぜひとも読みたくなって国会図書館に出かけると、たしかにそれは彼らしかった。上手く書こうという気はさらさらないが、こ文を書くよう導いたのには、そんな背景もあったのだ。

夢のことをしゃべろう

他には、別に

ないから

解放の語をいつ知ったは分らぬ

けれど 十二歳でジャン=ジャックに会い

グロチウスと自然法て何だでストップした

それは御愛嬌でいい

プロレタリアートの学校ではないが

あゝ高校最初の同窓会、ふだん

「これからは俺 マルクスだと思う」とぼくに言う口もきかない若死にしたMが

大学は享楽と解放の気にあふれ

レーニンの著作のゼミに百五十人来た

感動はしないが同伴はして

Emancipation for all of us

コロニスト・ジュニアの作家Gの本音の

少数派グループに入り

アジリもした、戦士にも会った

うるさいのはベネズエラのチャベスくらいですべてを吸いつくしたがる夢のことをしゃべろう

誰もしゃべらなくなった夢

のことを

夢の不様な没落の前

ちっぽけな実践の失敗の後

改めて中味を見れば

気の弱い武人大君の

資本論は新編の神曲であり

レーニンはレーニン全集の著者でしかなく

心根を犠牲に

宣伝でしかない夢に

動かされやすい人間の性格

そういえば新約、コーランの昔から

偽予言者にはこと欠かず

多種のナショナルな夢にもつきあわされたが

御用心、御用心

連帯の語すら知らない少年少女に

しゃべる

多分効き目などないが

老いの繰り言

他にすることも

(二〇一〇年)

ないので

(大岡俊明「繰り言」「暁光以後」七号、二〇一〇年)

ŧ

明氏の死を悼む」 \*1)「新 simmel20 の日記 2021 年 06 月 16 日 - 畏友大岡俊

https://simmel20.hatenablog.com/entry/2021/06/16/15240

\*2)『暁光以後』は年一回刊行の雑誌で、一号(二〇〇四年)か会。大岡は毎号欠かさず、数編の詩を掲載している。各詩には執筆年も配され、刊行時だけでなく、一九八〇年代、九〇年代にしたためたものもあった。それ以前についてはつかめていなにしたためたものもあった。それ以前についてはつかめていないが、どうやら詩歴は短くなかったようだ。

九四五年前後だろう。七十代後半で他界されたことになる。\*3)『暁光以後』に一九六三年卒業とあるので、その生年は一

### 【第32回メデジン国際詩祭報告】

### 寄稿エッセイ「静かな浜」とともに

---- 32° Festival Internacional de Poesía de Medellín

新井高子

思えば幸運な初夏だった。世界的に有名な2つの詩祭、6月にはロッテルダム国際詩祭に生出演で招待され(159号に報告執筆)、7月にはメデジン国際詩祭にオンラインで招かれた。メデジンの盛大さはジェフリー・アングルスから聞いていた。「コロンビア人は詩が大好きで、会場の広場は、信じられないほど大勢の聴衆で溢れ返った」と。

コロナ下のためオンライン出演になると聞き、残念に思ったのは言うまでもない。だが、第 32 回のテーマは、「Pas Mundial, Paz con la Naturaleza (世界の平和、自然との和解)」だという連絡と同時に、これに関するエッセイを執筆してほしい、スペイン語訳して広く発信したいとの依頼が来たとき、その意気込みに、単なる代替としてのネット開催以上になるだろうと直感した。2021 年の年末のことだった。

それからしだいに概要がわかれば、見事に大規模、かつ 周到な計画だった。コロンビアの詩人を中心にした現地 開催と、世界各地の詩人をネットで結び付けながら、詩祭 は3週間の長期にわたって行われるという。つまり、その 運営者は、詩朗読やコラボレーションを無料発信するた めの一大放送局を仕立て上げるつもりなのである。

現地時間では7月 10 日の夜、マレーシアの Bernice Chauly とともに、「Poesía femenina del lejano Oriente (東ア ジアの女性詩)」(約80分間)という枠にわたしは出演し、 自作詩を朗読した。ラテンアメリカ文学の読書、さらに詩 祭やブックフェアによるアルゼンチン、メキシコへの訪 問から、詩に出会うためには衣食の切り詰めさえ惜しま ない情熱、詩の神が路傍にいるかのようなそれへの親愛 が、中南米にあることを感じてきた。わたしなりに心し て、横浜の自宅から臨んだつもりではあったが、メデジン の放送室でそのスペイン語訳を朗読する Damaris Román が素晴らしかった。事前に丁寧に読み込んでくれたに違 いない。日本語の呼吸や抑揚を即座に掴まえ、踏まえてく れたので、わたしたちはネット越しでありながら、双子の ようだった。Facebook と YouTube が連動した中継では、 つぎつぎに視聴者からコメントも書き込まれ、その数は 190件に達した。ふしぎな高揚を感じた。

開催期間(7/9~30)、その中継をなるべくわたしも覗くようにしていた。スペイン語はわからぬものの、詩人たちの詩の質は声色でも伝わってくる。現地会場で詩と音楽のコラボレーションが、手話も交えて盛り上がっている様子には胸が熱くなり、そうして厳かに閉会を迎えて、

「東アジアの女性詩」のサイトを再び開くと、驚くべきことに、閲覧者数が 1.2万人にのぼっているではないか。たしかに、「信じられないほど大勢の聴衆」。この先も含め、これほどの人々が耳傾ける機会は、わたしにとってあり得ないだろう。コロナ下を逆手にとってネット環境を活かすことで、運営者はスペイン語圏全体が支持する催しへ、詩祭を仕上げたのである。

朗読詩人らの作品を編集した、詩祭記念のスペイン語 雑誌『Revista Prometeo 117-118 (Año 40)』が刊行された のも嬉しい。アメリカ大陸から 60 名、アフリカから 17 名、アジアから 24 名、ヨーロッパから 24 名、オセアニアから 6 名。合計 131 名の作品が掲載されている。この 催しの規模の大きさが伝わってくるだろう。

以下に、事務局に提出した批作エッセイの日本語原文とその英訳を掲載する。スペイン語訳は、略歴紹介とともに、詩祭が発信する Facebook でそれぞれの詩人ごとに公開された。批詩「ナイロンスカーフ」「ヘルド」(『ベットと織機』所収)をスペイン語訳してくれた Arturo Fuentes、詩祭を運営した Luis Eduardo Rendón、Fernando Rendón に、この場を借りて感謝したい。いつか当地を訪ねられることを祈りつつ。

\*

【テーマ「自然との和解」に関して】

### 静かな浜

海辺の都市に住んでいる。名は「横浜」というが、いわゆる浜はここにない。うちから岸まで歩いてすぐなのだが、波音は聞こえない。完璧に護岸工事がなされているから。まるで巨大生物を鉄の鎖で飼い慣らすかのように、埋め立てをし、コンクリートで囲われた海。果てしないプールにも見える。

だが、この先からは、都市民の群れがあっけなく消える。人は住めない異界なのだ。わたしの肉眼で覗きこめる範囲だけでも、海草が揺らぐ水中には、ボラ、スズキ、クロダイ、時には大きなエイもゆうゆうと泳ぐ。橋桁にはカキやムラサキ貝が群がっている。

空も大きい。建物のない青い広がりをカモメが行き交う。先日は、うちのベランダの手すりにトンビが留まっていた。鋭い目がわたしに気付くと、大きな翼を広げて飛び立ったが、彼らにしてみれば、コンクリートと鉄でできた高層マンションは、妙な規則性をもつ岩山にすぎないだろう。

肥沃な土の恵みにあずかれない、薄っぺらい石の山。そこにたくさん開いた横穴の一つが、わが住まいなのである。鳥たちからすれば、わたしは、乾いた岩にしがみつくサボテンのようなものかもしれない。

そうしてそのベランダで、朝の水やりを怠らず、四季

折々の苗を花屋で買っては、せっせと愛でている。蕾が開けばうっとりする。だが、植木鉢の貧弱な地味と地量では、果実はなかなか実らない。ある時、柿の種子を放ると、いつのまにか芽が出て、葉は付けるようになったが、ゆうに十年以上たつのに、実ったことはない。

都市とは、結実する力を失った徒花なのだろう。そこに「悪の華」を捉えたフランスの近代詩人もいたが、いまやその大輪が垂れながす毒水のために、横浜湾の魚は口にするものがいない。漁師たちはとつくに廃業した。コロナ下、釣り糸を垂らす人は増えたものの、時間潰しをしているだけだ。釣ったあとは、海へまた戻すのだから。高値で取引されていいクロダイがこれほど豊饒なのは、そんな理由なのである。一面では、この異界は、不思議な魚天国とも言える。

ヒューマニズムも頽廃美も通用しない場所にわたしはいる。こんな穴蔵暮らしの身では、おおらかな自然礼養もできるはずがない。だが、まずはしかと胸に刻みたい。矛盾と皮肉にまみれたこの町も、その一部だということを。トンビが岩山を見ているように、汚水のなかで魚がさかんに交尾しているように、都市が自然から自立している、なかんずく、それを克服できると考えるのは、傲りという以上に思い違いなのである。

吹き溜まりと言えばいいのか、近所の一角には、貝殻が打ち寄せられて堆積した場所がある。護岸の海側の隅っこで、それらはなだらかな傾斜をなし、小さな小さな天然の貝の浜をつくろうとしている。 幽かに波音さえ立てながら。

野生は、片時も手を休めていない。世を見つめ、そうすることで破れ目を探し、その奥の奥にある原初の力を掴みたい。新しい詩の誕生をそうして夢見る。

\*

[A short essay on the issue of a Pact with Nature]

### A Quiet Beach

I live in a seaside city. Although it is called "Yokohama," (literally "horizontal beach") there is no hama ("beach") here. It is only a short walk from my house to the coast, but you cannot hear any sound of waves, because the entire coastline is covered with protection works. The sea has been reclaimed and surrounded by concrete, like a huge creature tamed with iron chains. It also looks like an immensely large pool.

However, from here, the swarms of city dwellers disappear abruptly. It is a different, non-human world. Even within my range of vision, I can see mullet, sea bass, black seabream, and sometimes even a large ray leisurely swimming around the weltering seaweed. Oysters and mussels are clustered together on the bridge beam.

The sky stretches out wide. Seagulls come and go through the wide-open blue space free of buildings. The other day, a black kite was perched on the handrail of the balcony at home. As soon as the bird noticed me with its keen eyes, it spread its wings and flew off. For a black kite, a high-rise apartment building must be just a mountain of limestone and iron with a strange pattern.

I imagine my house is one of many caves opening out on the cliff wall of a flimsy pile of rocks unable to enjoy the benefits of fertile ground. From the viewpoint of a bird, I may look rather like a cactus clinging onto a dry rock.

On my balcony, I diligently water plants every morning, buying seedlings in season at flower shops as a treat for my eyes. Flowering buds fascinate me. However, it is difficult to harvest fruits with a planter, due to the poor soil in terms of both quality and quantity. More than ten years ago, I threw a persimmon seed into the planter, and it sprouted on its own and grew leafy, but the plant has never borne fruit.

It seems that a city is like a sterile flower. Early modern French poets may have found *The Flowers of Evil* in cities, but nowadays, because of poisonous water drained from the large flower of Yokohama, nobody eats the fish caught in the bay. Fishers abandoned their business ages ago. It is true that more people are throwing fishing lines in the water during the pandemic, but they are simply killing time; they return their catches to the sea. That is why black seabream, which could have been traded at a high price, is abundant in this water. In a sense, this "different world" is a paradise for fish.

I am standing in a place where ideas like humanism and decadence have no meaning. There is no way a cave-dweller like me can generously appreciate nature. However, I should etch in my mind that this city, stained with inconsistency and irony, is also a part of it. As a black kite looks down on my pile of rocks, or fish mating in foul water tell, the idea of a city being independent from nature, or even overcoming nature, is simply a misconception, rather than arrogant.

I am not sure whether you can call it a drift, but in a corner near my house, there is a place where seashells washed ashore are piled up. In a corner of the revetment here, sediment forms a gentle slope, and the area is becoming a tiny natural coastline of seashells, even generating a faint sound of waves.

Wildlife never rests, even for a moment. I want to look at the world, find a crack, and grasp the primordial energy hidden way back behind it. In this way, I am dreaming of the moment when a new poem can be born. (訳・エアクレーレン)

\*プログラム「東アジアの女性詩」は Facebook で今も試聴可。 https://www.facebook.com/festivalpoesiamed/videos/718427312587461